

# 霞

## - 2008年度秋季展示室だより - 土浦市立博物館 平成20年10月1日発行 (通巻第5号)

土浦市立博物館では春(4~6月)・夏(7~9月)・秋(10~12月)・冬(1~3月)と季節ごとに実物資料の展示替えを行っています。本誌「霞(かすみ)」は、折々の展示資料の見どころをご紹介、解説するものです。また、展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

### 目次

古写真・絵葉書にみる土浦(5)・・・1
博物館からのお知らせ・・・・・・・・1
【2008年度秋季の展示資料解説】
埋蔵銭(中世)・・・・・・・・2
「御隠居之節」の刀(大名土屋家)・・・3
山村才助日藏「坤輿万国全図」(近世)・・・4
描かれた祭礼を読み解く(近世)・・・5
常南電気鉄道(近代)・・・・6
市史編さんだより・・・・・・・・7
「霞」短信・・・・・・・・8
コラム(5)二つの博物館・・・・・・・・8

### 古写真・絵葉書にみる土浦(5)

#### 古写真「虫掛付近を走る筑波鉄道」



市内虫掛<sup>むしかけ</sup>付近の田園を走る筑波鉄道です。昭和初期の土浦には常磐線・筑波鉄道・常南電気鉄道の三鉄道が開通していました。筑波鉄道は沿線の石材・薪炭・繭などの輸送手段として、大正7(1918)年に全線開通。筑波山観光の足としても活躍しました。昭和62(1987)年に惜しまれながら廃線となり、現在は路線跡が「りんりんロード」としてサイクリングに活用されています。【情報ライブラリー検索キーワード「虫掛」「筑波鉄道」】

## 博物館からのお知らせ

第30回企画展「土屋家の刀剣 - 大名家のおつきあい - 」 会期 10月3日(金)~11月9日(日)

国宝・重要文化財の公開は10月28日(火)~11月9日(日)

【展示解説】 10/18(土)午後2時~ 11/1(土)午後1時~ 【抹茶の無料接待】10/5(日)・10/12(日)  
土浦第二高等学校茶道部、10/18(土)つくば国際大学高等学校茶道部 いずれも13時~15時、先着50名

**はたおり体験** 11/8・15・22・29(土曜日)に実施 はたおり体験は要予約、詳細はお問い合わせください。

**連続歴史講座「墨僊塾」** 10/11(土)「書にみる人となり」(大塚博さん)・11/8(土)「地理教育と教科書」  
(青木光行さん)・12/13座談会「墨僊と我が家 - 商家の暮らし」(本間隆雄さん・石塚英岳さん・尾形省三さん)いずれも13時30分~

**無料開館** 11/1~9(国民文化祭期間)・11/4は休館)11/13(県民の日)

**無料臨時開館日** 11/3(文化の日)

**10~12月・年末年始の休館日** 11/3(文化の日)をのぞく毎週月曜日  
10/14(火)・11/4(火)・12/23(火)・12/28(日)~1/5(月)

**館長講座にご参加ください!**  
**「常陸国風土記の世界」**  
(毎月第3日曜日)

10/19・11/16・12/21

時間 午後2時~3時30分  
講師 茂木雅博 館長

# まいぞうせん 埋蔵銭

## 霞ヶ浦をめぐる富裕者

『花咲爺』の大判小判がザックザク、とはいかないまでも、実際に地中から古銭が大量に発見されることがあり、考古学の世界ではこれを埋蔵銭と呼んでいます。ここでご紹介する埋蔵銭は、市内木田余町の深さ約1mの地中から偶然に発見されたものです。埋蔵銭は、地元で作られた素焼きの土器に入れられていました。通常は、陶磁器や素焼きの壺や甕が、大量の銭を埋めるときに使われています。また、箱や桶などの木製の容器や、布の袋などを使用することもあったようです。銭の大半は中国からの渡来銭（銅銭）で、藁のような植物質のひもに通した、縶と呼ばれる状態で大量にまとめて埋められていました。ひもが腐らずに縶で発見されることは珍しく貴重なもので、銭95~97枚を1単位とし、10単位を1縶に連ねたような状態が見てとれます。1単位は銭100枚(100文) 1縶は銭1,000枚(1貫文)に相当すると考えられます。木田余出土の埋蔵銭は全部で約11kg、枚数にして約3,000~3,500枚と推定されます。

土浦市内の手野、木田余、神立などから、地中にまとめて埋められた大量の銭が発見されています。このような例は全国各地でも報告されており、約300万枚を超える銭の出土が確認されています。銭を注意深く観察すると、表面に「永楽通寶」など銭の名称が書かれていることがわかります。これらの名称からこの銭がいつ頃どこで作られたものかを知ることができます。その結果、発見された埋蔵銭の大部分が、今から約1,300年から500年くらい昔に中国で作られたもので、銭を埋蔵したのは中世と呼ばれる今から500年前頃であることがわかりました。ちなみに、木田余の埋蔵銭は、判別できた銭の年代や土器の特徴から、15世紀末から16世紀初頭頃の室町時代に埋められたものと考えられます。埋蔵銭には、朝鮮半島で作られた銭も少数含まれていましたが、それに比べ日本の銭はほとんど見つかりません。

これらの銭は、中世の物価から見てもかなりの大金になります。埋蔵銭は、大量の銭を埋めることのできた富裕者の存在を想像させます。木田余、手野の銭の発見された場所の近くには、木田余城や手野城など中世の館跡があったことが知られています。これらの館は中世にこの地域を支配した小田氏に関係したものと伝えられており、銭の埋蔵者もこれに繋がる地元の領主層であった可能性も考えられます。地中深くに埋められた大量の銭からは、霞ヶ浦に臨むこの地域がさまざまな商品流通などにより経済的に発展し、豊かに成熟していた社会状況を読み取ることができます。(塩谷修)



埋蔵銭のかたまり(木田余出土)

写真は全体の3分の2程度



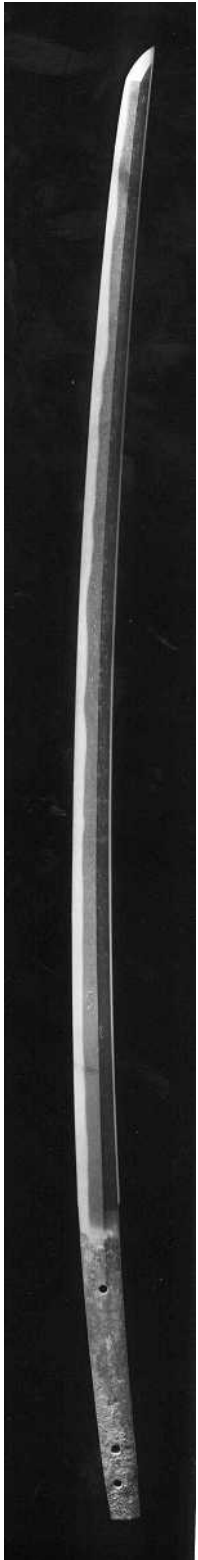
埋蔵銭が入っていた土器

このページでご紹介した資料を中心とする展示解説会を12/6(土)午後2時から開催いたします。



# 「御隠居之節」の刀

## - 土屋家 2代藩主政直が老中を辞任した時に贈られた刀剣7口



土浦藩土屋家の2代藩主政直(1641~1722)は、貞享4(1687)年から享保4(1719)年までの32年間、幕府の老中を務めていました。老中は、大名支配など幕府の全国支配権に関する政務を担う重職です。定員は4~5名で、3万石以上12万石以下の譜代大名(延宝期以降1673~)が就任するのが原則でした。江戸時代を通じた平均就任期間は約10年といわれていますから、政直は平均よりもかなり長い期間務めたといえます。老中内の席次は、前任者順を原則としているので、長く務めるほどに序列が上がっていき、政直も老中首座となっています。そして政直が79歳で職を辞任した際には、大名7家から刀剣が贈られてきました。贈られた刀剣と贈り主は、以下のとおりです。

刀剣名	贈り主	贈り主の姓名	藩名及び石高
備前景光御刀	御隠居之節	井伊掃部頭様	井伊直該 彦根藩 30万石
越中則重御小脇指	御隠居之節	紀伊中納言様	徳川宗直 紀州藩 55万5千石
備前包平御刀	御隠居之節	松平美濃守様	柳沢吉保 甲府藩 15万1千石
左吉貞御刀	御隠居之節	松平出羽守様	松平清武 館林藩 5万4千石
来国光御刀	御隠居之節	松平丹後守様	松平重栄 杵築藩 3万2千石
備前信房御刀	御隠居之節	松平新太郎様	池田光政 岡山藩 31万5千石
吉岡一文字御刀	御隠居之節	細川越中守様	細川宣紀 熊本藩 54万石

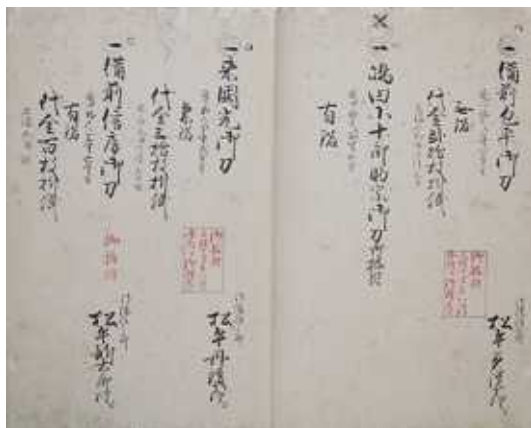
刀剣名と贈り主は「御腰物」原文のまま 是土浦市立博物館所蔵品

土屋家の刀剣台帳である「御腰物」の中には、贈り主の脇に「御隠居之節」と書かれ、政直が隠居した際に贈られてきた刀剣であることを伝えています。これらの刀剣を贈ってきた大名家では、政直が老中職を20年近く務めた宝永年間(1704~1710)から正徳年間(1711~1715)の間に、藩主の代替りや転封(領地替え)、石高加増など、藩にとって大変重要な転機が訪れています。何れの藩も御家安泰と喜ばしい結果となっており、これらの事と政直「御隠居之節」に贈られた刀剣には、何らかの関係があるように思えます。

多くの大名家の刀剣が散逸した中で、土屋家刀剣と「御腰物」は、大名間の刀剣贈答における意味を明らかにする上で、全国的にみても大変貴重な資料といえます。

(中澤達也)

備前包平・左吉貞は11/9(日)まで、備前信房は10/28(火)から11/9(日)までの展示となります。ご了承ください。



左：備前包平御刀 甲府藩柳沢家より

右：「御腰物」

このページでご紹介した資料を中心とする展示解説会を10/4(土)午後2時から開催いたします。このページの資料展示は11/9(日)までとなります。



# 山村才助旧蔵「坤輿万国全図」

## 元になった木版印刷図が重要文化財

海には青々とした浪がたち、陸地には緑の山脈が連なって描かれています。世界図の外周が金箔で飾られた当館所蔵の世界図「坤輿万国全図」は土浦藩士で地理学者の山村才助（1770 - 1807）が所蔵していたと伝えられています。

手書きのこの世界図には元になった図があります。原図は木版印刷のモノクロ版で、日本にある3点はすべて重要文化財に指定されています（宮城県図書館蔵他）。どうして手書きの彩色図ではなく、木版印刷図が重要文化財なのでしょう。

「坤輿万国全図」は、イタリア人宣教師マテオ・リッチが1602年に北京で刊行したのが最初です。布教には信用を得ることが必要と考えたリッチは、ヨーロッパの文化や技術を次々に紹介しました。その一つが世界図でした。

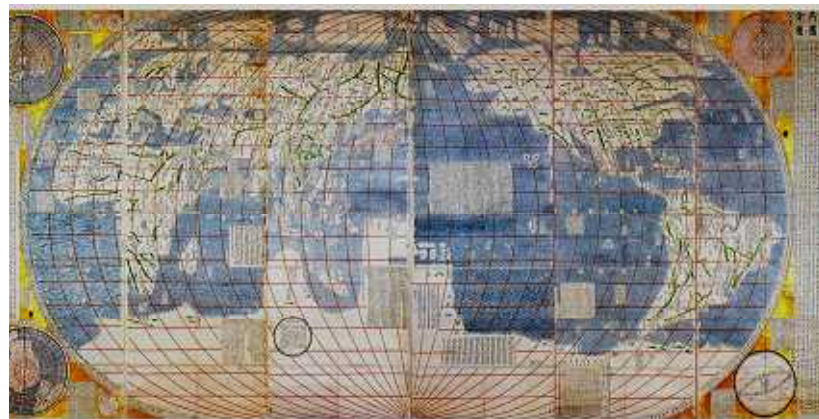
正確なヨーロッパの位置や新発見のアメリカ大陸など最新の情報が盛り込まれた世界図は、それまでインドや朝鮮、日本など、限られた国々のそれを見ていた中国の人々に新鮮に映りました。「坤輿万国全図」は人気を博し、数度にわたって版を重ね、数多く出回りました。

刊行後間もなく、長崎を経由して日本に入りました。すでにヨーロッパからも世界図が入って来ていましたが、日本人はヨーロッパ製世界図ではなく「坤輿万国全図」を写し、参考にし、盛んに活用しました。多くの彩色写本が作られ、当館の調査では21点を確認しています（平成8年時点）。山村才助が所蔵していたのもその一つです。

日本人が「坤輿万国全図」を受け入れたのは、地名や解説が漢字で書かれていたためでした。「坤輿万国全図」は、初めて太平洋中心に描かれた世界図でもありました。それまでの世界図はヨーロッパとアメリカの間にある大西洋を中心としていましたが、マテオ・リッチは中国が図面の中央になるよう、つまり太平洋が中心になるように配置を替えました。おのずと日本は世界図のほぼ中央に描かれ、日本人に好ましく映りました。

木版で大量に刊行されたにもかかわらず、木版印刷図は世界に4点しか現存していません。1点はバチカン市国の教皇庁図書館にあり、これはリッチが署名を添えて送ったものです。残りの3点は日本にあり、その希少性と日本人の世界認識に与えた影響の大きさからすべてが重要文化財となっているのです。

（木塚久仁子）



「坤輿万国全図」(土浦市指定文化財)



日本部分



イエズス会の印(上・下)

このページでご紹介した資料を中心とする展示解説会を10/25(土)午後2時から開催いたします。



# 描かれた祭礼を読み解く

## - 万度のおもしろさ、華やかさ、力強さ -

土浦城下の祇園祭を描いた「土浦御祭礼之図」には、祭礼行列に参加する華やかな万度が数多く登場します。万度とは、木の柱に行灯や花飾りなどをとりつけ、頂に桃太郎・道成寺・土俵入りなど様々なつくり物を載せたものです。沼尻墨僊（1775 - 1856）の「墨僊漫筆之稿」には、土浦へ来た江戸の職人が万度をつくったとの記録があります。どうやら土浦は江戸の祭礼にならって、祇園祭に万度を取り入れたようです。

「土浦御祭礼之図」に描かれた万度をみていくと、不思議なもののようであります。たとえば、大町の万度。大きな貝と竜宮城のような建物がみえる謎の万度です（図1右）。この万度はいったい何なのでしょう？ 歴史学者の黒田日出男さんらはこれを「屋気楼」が表現された万度だと推測しました。むかしの人たちは「屋気楼」の正体を、海中の大蛤が吐き出す気によってできる建物と想像していたそうです。「屋」は大蛤のことで、その「気」で海上に現われる「楼閣」（高い建物）なので「屋気楼」というわけです。そこで再び詳しく大町の万度をみてみると、上に向けられた大蛤の口からは、白い煙のようなものが立ち上っています。その上部には波が描かれ、さらに木々に囲まれた楼閣がみえます。確かに、人々がイメージしていた「屋気楼」にぴったりです。祭礼行列に姿をあらわした「屋気楼」は、人々の耳目を集めた万度だったのではないのでしょうか。

ところで、祭礼図に描かれた万度とよく似たかたちのつくり物を、現在の祭りでも見かけることがあります。たとえば図2の「まとい」です。土浦市に隣接するかすみがうら市下佐谷の祇園祭に登場し、子供神輿とともに神社からお仮屋へと渡御をします。おなじく土浦市に隣接するつくば市大形の愛宕神社祭礼では「万灯」が登場します。たくさんの花にかざられた大きな万灯には2つの行灯がつき、夕刻その行灯に火がともされて、集落の辻から神社へ渡御します。土浦市大畑の「からかさ万灯」は仕掛け花火として有名で、移動をすることはありませんが、その形にはやはり万度と共通するものがあります。

下佐谷の「まとい」は重量があるうえ、行灯・紙製の花を結んだ竹（約30本）・将棋の駒などが全て柱の上部に取り付けられているため、重心がかなり上の方にあります。バランスをとりながら運ぶことも困難ですが、下佐谷の若者たちは、これを所々で高らかに持ち上げて舞います。うまく舞うと花の部分が弧を描いて「ぱっ」と開きます。「まとい」の最大の見せ場で、男たちの力と技量がためられる瞬間です。土浦城下を進んだたくさんの万度でも、題材のおもしろさや華やかさだけでなく、力強さや技が競われていたのかもしれない。現在の祭りを参照することによっても、近世の祭礼を読みとくヒントが得られそうです。（萩谷良太）

参考文献 黒田日出男ほか編『朝日百科日本の歴史別冊 歴史を読みなおす 17 行列と見世物』（1994年発行）



図1 「土浦御祭礼之図」(部分、右が大町の万度「屋気楼」)



図2 かすみがうら市下佐谷の「まとい」

このページでご紹介した資料を中心とする展示解説会を11/22(土)午後2時から開催いたします。



# 常南電気鉄道

## - 土浦と阿見とを結んだ路面電車 -

土浦を走る鉄道といえば常磐線。かつてあった鉄道として筑波鉄道（通称 筑波線）を思い浮かべる方もいらっしゃるでしょう。しかしもう一つ、「常南電車」と呼ばれた路面電車のことをご存知でしょうか。

常南電気鉄道（通称 常南電車）は、航空隊の関係者や見学者などの乗客を見込み、土浦～阿見間に敷かれた鉄道でした。昭和8（1933）年の時刻表をみると、土浦駅発 5:53、阿見駅着 6:11 とあり、20分程度の乗車だったことがわかります。車両は1輦で座席は18人分、当時乗車した方の記憶によると、全体的に黄土色っぽい、窓の下には濃い茶色の線がある車体だったそうです。

当初は土浦駅を起点として阿見・荒川沖・谷田部・水海道などを結ぶ計画でした。大正11（1922）年の起業目論見書には「交通機関の完備は更に観覧者を誘引助長する」とあり、この鉄道の将来性に期待をこめた様子がうかがえます。大正12年8月30日には土浦町の日新楼において創立総会がひらかれました。しかしその翌々日には関東大震災が発生、役所への図面類の再提出や材料の高騰による工事の遅滞など、事業はやや暗雲が立ち込める中での幕開けとなったようです。

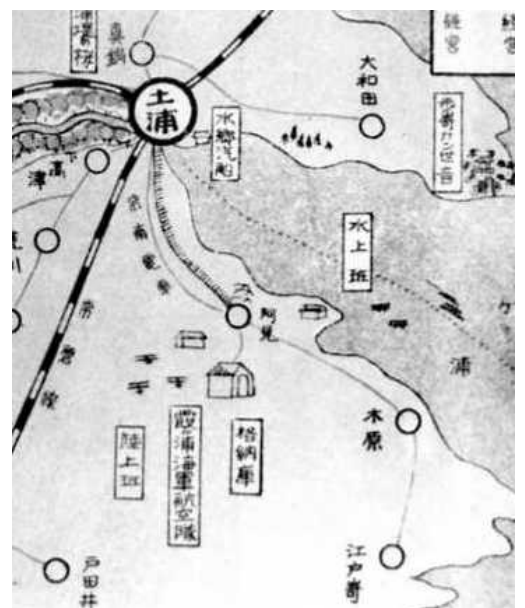
大正13（1924）年に工事が着工となり、大正15年10月には第一工事として、中家村根崎（現土浦市富士崎町）～阿見村青宿間の4.1キロが開通しました。開通した10月9日から11月30日までの乗客は一日平均1,353人と、予想以上であったと事業報告書は伝えています。しかしこれ以後は横ばい又は減少傾向となり、昭和3（1928）年には土浦駅構内乗り入れ（土浦～阿見間15銭）が実現しましたが、残念ながら業績は芳しくありませんでした。昭和11年上半期の一日平均乗客数は720人に減少、ついには昭和13年、廃線となったのです。

航空隊では隊員の輸送に船を利用したこと、徒歩も可能な短い距離であること、自動車（バス）も平行して走っていたことなど、様々な理由により常南電車は思いのほか利用されませんでした。廃線後は軌道も撤去され、面影はわずかに残された写真や資料、記憶の中をたどるのみとなりました。しかし、航空隊とこの地域の密接な関わり方を語るものとして、常南電車は象徴的な鉄道であったといえるでしょう。

（宮本礼子）



桜川鉄橋を渡る常南電気鉄道



遊覧交通案内（昭和初期・部分）

このページでご紹介した資料を中心とする展示解説会を11/1（土）午後2時から開催いたします。



# 市史編さんだより

## ～～～祖先より伝わった古文書を大切に伝えていくために～～～

現在、博物館には所蔵者からの寄贈・寄託・借用などを受けて、沢山の古文書が収蔵庫におさめられています。「古文書」とは過去の時代の史料となる古い文書の事で、差出人・受取人・用件・日付などを備えた公文書・私文書を言いますが、それ以外の古記録と共に史料として非常に大切なものと考えられます。文書史料は、地方においては旧名主・戸長のお宅など基本的に家ごとに伝来しています。博物館ではこの伝来の形式を崩さないよう、一軒の家に伝来した文書は一つの史料群として把握し、整理・保存・研究をしています。

文書史料の散逸を防ぎ歴史資料として活かしていくために、当館の基本的な文書整理の仕方に従い、市民グループの「土浦市古文書研究会」の皆さんの協力を得て整理作業を行っています。そして、それらを目録にまとめ『土浦市資料目録 土浦の古文書』として毎年刊行しています。

それではここで実際に行っている古文書整理の様子をご紹介します。

まず博物館に寄せられた古文書は害虫などによる傷みを防ぐため燻蒸作業を施します。次に和紙の長期保存に優れた中性紙の封筒に一点ずつ文書を納め、文書内容を読みとり、書かれている情報に基づいて封筒の表に書き入れます。さらに年代順にならべて目録番号をつけ、目録台帳を作ります。これにより史料群にはどのようなものが含まれているか、どのような性格があるのかを把握することができます。こうした作業を経て目録が刊行され、今後の閲覧への便宜を図っています。この整理作業は二十余年に亘り古文書研究会を中心に続けられており、すでに資料目録として刊行している数は18集になります。このようにして祖先より伝わった史料は家の宝としてだけでなく、地域の宝としても長く大切に伝えられていきます。



左：古文書 右：中性紙の封筒

次に古文書整理に欠かすことの出来ない「土浦市古文書研究会」について少しご紹介したいと思います。

昭和59年に「社会教育センター古文書講座」を修了された方々を中心に、昭和60年度土浦市教育委員会の依頼を受け古文書の調査及び整理を行い、郷土文化の向上に努めることを目的として「土浦市古文書研究会」が発足しました。その活動は脈々と継続されており、毎月第1・3金曜日に当館会議室にて行われています。和やかな雰囲気の中、皆さん大変意欲的に取り組んでおられます。



-----

普段の生活の中ではなかなか触れることの出来ない古文書の世界に少しでも興味・関心をお持ちの方は是非博物館へ足をお運びください。当館では古文書の展示及びその解説文をご覧いただけます。また古文書をテキストとして用いた講座なども実施いたしますので、ご利用なさってみてはいかがでしょうか。 國枝文江（市史編さん係臨時職員）

「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声やサークル活動記録などをお伝えしております。今号は「博物館古文書の会」の活動を秋元照子さんにご紹介いただきます。

## 「博物館古文書の会」を心の糧にして

平成 15 年 4 月、「博物館古文書の会」が新しく発足しました。それは、より多くの人達が古文書を学ぶことができるよう、また解説した古文書を会の成果として公開していけるようにとの博物館の意図をふまえて、それまで博物館を拠点に活動してきた 3 つの古文書勉強会と、古文書講座修了生を対象にあらためて希望者を募り、古文書を解説する会として生まれたもので、会の一本化が図られました。

本会の目的は、博物館のご指導のもとに土浦市内外に残る古文書の解説と研究にあたり、郷土文化の向上に努めることにあります。そのためには、祖先の守ってきた貴重な歴史資料を大切に、後世に伝えていく重要性を再認識して活動することが大事です。

会の定例活動日は月 2 回で、第 2・4 金曜日の午後 2 時間。勉強の方法は輪読形式で、解説した資料は博物館に提出しています。古文書はなかなか判読の難しい面もありますが、皆さんそれは熱心に取り組み、時にきびしく時に笑いありで、読み解く苦しみと楽しさを味わうなか、自ずと江戸時代の文化や歴史、背景などを身近に感じつつ自分のものになっていく面白さがあります。

さらに学芸員さんによる館外活動（城下町土浦の歴史散策）や、博物館展示替えの都度見学と解説をしていただけるのも、とても有難いことです。

これからも皆さんと生涯現役で、タイムスリップした古文書の世界に身を置き、公開のお役に立てることを励みにして、解説により一層努めていきたいと願っております。

秋元照子（博物館古文書の会会長）

## コラム（5） 二つの博物館

土浦には、当館と上高津貝塚ふるさと歴史の広場（市立考古資料館）と、地域の歴史を紹介する博物館が二つあるのをご存知でしょうか。二つの博物館の違いについて、ふだんは、古文書や美術・工芸品などの歴史資料と、遺跡から出土する土器や石器などの考古資料と、それぞれが収集・展示する資料に専門的な役割分担があると説明しています。

雄弁に時代や人物までも語る文献資料と、それ自体は黙して語らず、人や年代すらも良く見えない考古資料とでは、歴史を紐解く研究法や解説の仕方に違いがあります。また材質の違いから、資料の保存方法も大きく異なることなどが、その住み分けの理由といえます。

ただ、二つの博物館がある大切な意味は、別の所にあると思っています。当館は土浦城跡、考古資料館は上高津貝塚に隣接し、史跡と一体の博物館が特徴です。地域の歴史は、先人が拓き育ててきた土地と共にあり、切り離しては語れません。二つの博物館は、江戸時代に整えられた町のあり様や縄文時代から続く当地と霞ヶ浦との長いつきあいを土浦の地域性として、景観と共に守り伝える役割を担っています。（塩谷修）

## 情報ライブラリー更新状況

【2008・10・1現在の登録数】

古写真 403点(+20)

絵葉書 284点(+38)

( )内は2008年7月1日時点との比較です。

展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。1ページでご紹介した古写真もご覧いただけます。

霞（かすみ） 2008年度

秋季展示室だより（通巻第5号）

編集・発行 土浦市立博物館

茨城県土浦市中央1-15-18

TEL 029-824-2928

次回展示（2008年度冬季）は2009年1月6日（火）からご覧いただけます。「霞」2008年度冬季展示室だより（通巻第6号）は1月6日発行予定です。次回のご来館もおまちいたしております。